
闇の鍵

M3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の鍵

【Nコード】

N4366Y

【作者名】

M3

【あらすじ】

皆さまのアンケート集計結果、多かった『青の祓魔師、未来編！』『執筆開始！！20歳となった憐達の成長を、しかとその目で見てみる！

序章（前書き）

20歳をむかえた燐含むかつての祓魔塾の仲間達、任務で忙しなかった彼らだったが：

：1つの鍵が、正十字学園に危機を及ぼし、この鍵が再び：彼らを引き合わせた！！

序章

人間と悪魔の血を引く少年・奥村燐の前に突然、父親である魔神サタンが現れた。

魔神サタンが自分の力を継ぐ燐を連れ去ろうとした際、燐の養父・藤本獅郎は燐を守って命を落とす。

燐は祓魔師になって、仇であり父である魔神サタンを倒すため、祓魔師である弟・雪男の指導の下、祓魔塾で志を共とする友人達と訓練を積んできた。

—あれから10年……

かつて祓魔^{ペイジ}訓練生として悪魔祓い（エクソジズム）を学び始め……
エクソ^{エクス}スワイア^{ワイア}候補生へも無事昇格して、祓魔師の道を地道に上がってきた燐達は
……

序章（後書き）

皆さま！

アンケートにご協力ありがとうございました！！

青エク、挑んでみます☆さあ、あたたかい目と心でご覧下さい！

10年越しの彼ら

「奥村先生!」

「?!」

―正十字学園・祓魔塾―祓魔師を志す者は、この塾に通い、祓魔訓練生ページとして悪魔祓い（エクソジズム）の学び、祓魔師としてのノウハウを仲間と共に叩き込んでいく。

生徒に呼び止められ振り向いたのは、奥村雪男……正十字学園歴代最年少で祓魔師の資格を取得した秀才だ。

「はい。なんでしょう？」

「えっと……遅れていた提出物を出したくて…」

「はい、提出締め切りは出来るだけ守って下さいね」

「は、はい!! すみません…」

「クス……よろしい。受け取りますよ」

ヒソ……

「相変わらずかっこいいよね☆奥村先生！」

「20歳だよ！？若いのに落ち着きがあってさ」

「「優しい!!……よね☆」」

「あたし奥村先生の悪魔薬学大好き！分かりやすいもん」

「……そういえば…奥村先生って双子のお兄さんいるんでしょ？
！」

「性格全く似てないらしいよ？」

「けど……祓魔師としての腕は…確かだった」

「だって……」

“キャンサー名誉騎士”の称号持ってんでしょ？ 隣先生………」

「はぁ…終わった…お昼休み、どこで食べようかな………あれ??
お弁当…」

「いたいた!雪男!」

「?!…兄さん…」

「お前弁当忘れてったろ」

雪男の前に現れたのは――奥村燐。

悪魔と人間のハーフだ。父・魔神サタンの血を濃く受け継いだ燐は、養父の藤本獅郎から預かった降魔剣を抜くことで、悪魔の力を解放する。

10年経ち、現在の奥村燐は、祓魔師の称号の1つ、“名誉騎士キヤンサー”を取得し、かつて養父だった藤本獅郎の称号：“聖騎士パラディン”を目指すと共に、仇である父・魔神サタンを倒すべく……現在も祓魔師として磨きをかけている。

とはいえ……10年経た今、昔のせつかちさや、“青い炎”のコントリールの不安定さも抜け、『学園一のナイト（騎士）』

と謳われるほどにまで成長を遂げた。

弟の雪男も、燐が候補生エクスイアの頃は、講師を担当し面倒を見ていたが、名誉騎士キャンサーとなった兄を背に、誇らしくも…現在“上級祓魔師”の称号の自分に、満足感を得られてはいなかった…

「ごめん…。なんか今朝バタバタしちゃってさ…」

「珍しいな。いつも時間に余裕のあるお前が」

「テスト作らなきゃいけないくて…。寝不足だよ」

「受け持つてる学問多いもんな。俺はほとんど実技で済ましちまってるから」

「またそうやって楽する…。たまにはペーパーテストっていうのも生徒には大切なんだから」

「へいへい、いつかな!」

『いつか?!』

「そういえばまた髪伸びたね…。なんかうざったそうだよ?…後ろなんて肩過ぎちゃってんじゃない。切ったら?」

「ああ…切りに行く暇なくてさ…。けど、この祓魔師のスーツにやこのくらいの髪の長さの方があってね?」

「兄さんだけだよ…そんな斬バラ頭似合ってるの…」

「おいなんだと!!…お前は変わり映えしねえなあ。奥村雪男くん。15歳の時とほとんど変わっておらんね。ん?」

「ム。……人間変わらないのが一番さ。それに、僕は背が高い。」

「ちっ！180がよく言うぜ！」

「185だよ。それは兄さんの身長だろ」

「変わんねーよ」

「悪いが5？も違う」

「うるせー眼鏡！コンタクトにでもしてみろってんだ！」

「コンタクトはめんどくさいんだよ。兄さんこそ、その髪を少しでも整えたらモテるんじゃない？」

「はっ、残念だな。雪男…今の俺は、もはやお前よりモテんだよ！
！今時の女子は、お前みたいな小食男子の真面目メガネキャラより、肉食男子の悪魔キャラの俺の方がキュン♪ときちまうんだな〜これが☆」

『悪魔キャラっていうか悪魔じゃん……』

「はあ…わかったわかった。とにかく、お弁当を食べさせてよ……
?? 兄さん、昼は？」

「もう食った。これからしえみの店に行くんだ」

「しえみさんの店に?…あ。じゃあついでに買い物頼んでいいかな
」

「おう。」

「じゃこれメモね。しえみさんによろしく」

祓魔用品店『フツマヤ』

祓魔師が使用する薬物の原料・植物その他様々取り扱っているお店だ。この店主を任されているのが杜山しえみという女性だ。燐や雪男と同じ年で、燐とは、共に祓魔塾に入り学んできた同期でもある。

エクスワイア
候補生時代から悪魔薬学などの薬品植物にくわしく、現在は、手騎士ティマー・医工騎士ドクターの称号を持つ中一級祓魔師である。

「しえみ、いるか？」

「?!り、隣!いらっしゃい」

「店に籠もりっぱなしか?身体に良くねーぞ」

「う、うん……でも、あと少しで屍系グールの魔障の毒に効く速効性の薬が出来そうだから…」

「そっか。相変わらずすげーな!」

「う、ううん!凄いのは隣の方だよ!名誉騎士キャンサー取得したんだから」

「俺は悪魔の力のおまけ付きだけどな」

「そんなことない。あんなに…悩んで…苦しんで…向き合ってきた」

力を、上手く使いこなせるようになったんだから、燐の努力の賜物でしょう？」

「ありがとな」

「／／えへへ。え…えっと…な、なにか、お買い物？」

「?! やべ…目的の忘れるとこだったわ。えっと、羊歯・牛爪・椒 2 つずつと…B 濃度の聖水 1 リットルとアロエ 2 切れ。あ・これ袋分けてくれるか？」

「はい。少しお待ち下さい！」

「?!」

『この気配……』

「ここにいましたかー。奥村くん」

「……やっぱメフィストか」

ーメフィスト・フェレス。正十字学園の理事長であり、祓魔塾の塾長である。燐や雪男の養父、藤本獅郎の友人であり彼の死後は、燐や雪男の後見人の役割を果たしてくれた。魔神サタンの息子である燐を、今までうまく手を回しここまで持ち上げてくれたのもメフィストだ。しかし、彼自身の詳細は一切公に出さないため、燐は、感謝している反面……腹の中が読めないメフィストに胡散臭さも感じている。

「いやあく探しました。」

「なんだ？」

「あとでお話しますので、理事長室までお願いします」

「任務か？」

「ええ。まあね☆」

『ホント胡散臭せえ……』

「あんたから直接依頼とは……イヤな予感だな」

「ええ…ちょっと厄介です。なので、今回は少し多めの班で挑んで頂きます」
パーティー

「……………わかった。」

「パーティーのメンバーはすでに私の部屋にいます……………では」

『上一級祓魔師が…多数のパーティーと任務？…どんだけ厄介なんだよ……………つたく、メフィストのヤロウ』

「隣、お待ちせ。はい」

「サンキューしえみ。これ、お代な！」

京より来たり

理事長室

「入るぜ」

「兄さんも呼ばれたのか」

「雪男」

「久しぶりやなく奥村くん♪」

「?!」

「名誉騎士なんて凄いな。こっち（京）まで噂滞っとるで」

「志摩！子猫丸！」

「…………お前も呼ばれたんか」

「?!…お前まで来てたとはな…勝呂?」

「なんで疑問形やねん!!」

「いや…髪がさ…」

「あははは! ほれ坊! いうたやろゝ髪おろしたら絶対奥村くん気付
けへんて!」

「気合入った鶏冠ヘア、保つといた方が…えかったんちゃいまっ
か?」

「やかましいわ! 廉造! 子猫丸までなんやねん! ええ歳して、髪持
ち上げとんのもカッコ悪いやろ」

「相変わらずクソ真面目だな」

「ふんっ！袈裟には髪おろした方がええ思ってたんや」

「和尚おっさまだろ！おっさま〜！」

「奥村……お前……バカにしとるやろ……」

勝呂竜士。当時、燐とともに祓魔塾に入学した時は、京都の仏門一派・明陀宗の若頭だったが、現在は父・達磨の意志を継ぐ、明陀宗の頭首であり、座主血統の勝呂竜士として京を守護している上一級仏教系祓魔師だ。詠唱騎士アリアと竜騎士ドラグーンを取得している。

志摩廉造・三輪子猫丸。廉造は、志摩家末っ子・子猫丸は三輪家当主だ。2人ともまだ若い、幼い頃から若頭である竜士の側にいたため、現在は頭の竜士の権限により、竜士の側近であり、廉造は京都出張所 祓魔師一番隊隊長を。子猫丸は、三輪家当主と、京都出張所 深部一番隊隊長の任されている。2人とも上二級祓魔師であり、廉造は騎士ナイト・詠唱騎士アリアの称号を取得。子猫丸は医工騎士ドクター・詠唱騎士アリアの称号を取得した。

「しかし、ホントに久しぶりだな。元気にしてたか？」

「まあまあですわ。やっと、廃れてた寺の信頼を取り戻してきたんやから」

「坊のおかげですわ。」

「へえ、仕事してんだな、お前」

「大きなお世話や！俺はおとんがやり遂げられなかったことをやっ
とるだけや」

「しかし、志摩も子猫丸も変わんねーな！勝呂が変わったら余計
変わらなく見えるな…」

「確かに…僕は変わってへんかもな。けど、志摩くんは四男の金造はんそっくり思いません？」

「あ！似てる！似てるわ！髪伸びて余計に」

「やめてー！やめてー！よりによって金兄はやめてー！」

「志摩くん、祓魔師一番隊隊長任命されはったんやから…柔造はんみたく髪黒染めて、切ればええのに。柔造はんみたくモテますよ？」

「それだけは堪忍」

「皆さん、お揃いですか？」

「おせーよ。メフィスト」

「だから奥村くん…仮にも理事長に向かってね…」

「京都からわざわざ勝呂達まで呼びやがって、どんだけ厄介な依頼なんだ？」

「……………分かりました。では、話しましょうか」

鍵

「事の発端は、一週間前、私は“中級以上”の屍グールの抹殺をお願いしました。」

「「「?!」」」

「理事長…あなたの結界がある限り、学園に中級以上レベルの悪魔の侵入を許すはずがない」

「はい。その通りです。雪男くん…しかし、いたのです。中級以上のグールが」

「それで、そのグールを殺れてか？」

「いえ。グールはネイガウス先生が処理しました」

「……問題はその後ってわけか」

「その後、ネイガウス先生からこの“鍵”を受け取りました」

「鍵？」

「倒したグールの腹の中から出てきたらしいです」

「…俺達（上級祓魔師）でも見たことねー鍵だな」

「その通り。どこに繋がる鍵か分からない」

「?!理事長…あなたにもですか?」

「わたしは学園だけにのみならず、あらゆる所に繋がる様々な鍵を扱っていますが、見たことはありませんね」

「俺達に、この鍵を調べろ……ちゅうことですか?」

「中級以上のグールの侵入も気になります。そこと並行して調査して下さい」

「中級以上のグールの召喚なんて、並の祓魔師では出来ません…坊」

「ああ…だから俺達も呼ばれたんか」

「とっとと解決したいんでね。長くパーティーを組んできたあなた

方でしたら、早急に片付けてくれそうでしたので☆」

「俺はええで」

「俺は坊を援護するだけですわ」

「僕もです」

「勝呂が乗るなら、俺もやるぜ」

「兄さんが何かやらかさないように、僕も承ります」

「おい」

「鍵は渡しておきます。解決して下さるなら、鍵はどうしてくれても構いません」

「分かった。」

「では、お願いしますよ……」

行動

「とは言ったものの、どこからどう調べたらいいいものか……」

「だな。いつそ鍵使ってドアあけてみつか？」

「そんな危険な橋渡れるかい!!」

「坊、まずは、その出てきたグールから情報もうた方がええんとか
ちやいまつか？」

「志摩……ああ。そやな。奥村、俺らはグールの線から調べる。」

「分かった。兄さん、僕達はネイガウス先生に少し話を聞いてこよう」

「そうだな!」

「奥村、鍵はお前が持つとけ」

「え?!俺なの?」

「奥村くん、一応この中じゃ一番上の称号持ってはるし……」

「悪魔に一番耐性あるから、いざとなっても大丈夫やろ♪」

「う・」

「兄さん、落とさないでよ」

「わ、わかってら!」

「ほな、俺らは行くで。なんか分かったら連絡するわ」

「分
か
っ
た」

調査？

「ここやな……例のグールが最後に滅却されたんは」

謎の鍵と、中級以上の悪魔の出現の真相を調べることになり、勝呂竜士・志摩廉造・三輪子猫丸の3人はグールの線から調べることにした。やってきたのは学園の裏にある森林への入口の側。グールが倒された場所だ

「……………坊。」

「……………ああ…かすかやけど、ごつつう臭うで」

「グールの大きさが分かりますな〜」

「これだけハッキリ臭い分かるなら、もしかしたら“あの時”が見えるかもしれへんな……子猫丸。」

「…やってみます」

子猫丸はグールが倒された箇所であろう、どす黒い血痕の後の中心に立ち詠唱を始めた。

宴の後よ…世に還らん…土にかえり血肉骨とかす…汝の宴に我をよべ……

「「?!」」

「坊! 来ます!」

子猫丸達の目の前には倒されたグールと数々の祓魔師の姿があり、激しい戦闘がくり広げられていた。先頭をきっていたのは上一級祓魔師イゴール・ネイガウス。中級以上のグールにネイガウスも最上級の屍番犬ナベリウスで受けて立っていた。

「?.....坊! あれ見て下さい!」

「グールの奴、なんか.....持ってはるで!」

「?!…………鍵か!! 最初から奴の腹に入っとったわけやなかったんか……」

「と。いうことは」

「誰かがグール召喚して鍵盗みに行かせたんや」

そのとき、ネイガウスの屍番犬ナベリウスの一撃がグールを直撃する……するとグールはけたたましいうめき声と共に血と肉体を拡散し消滅していった。決着がついたようだ……消滅した後には、鍵が1つ落ち、ネイガウスが手に取る。

「坊」

「なんや廉造」

「あそこ、下」

「?!」

「坊!ぐ、グールの手が……う、動いてはる…」

「キモいな」

「あれ……手に鍵握ってんのとちゃうか？」

「……どういふことや？逃げたグールの片手に持ってたんは確かに鍵やった。じゃ、ネイガウス先生が拾ったあの鍵はなんや？」

「ね……ネイガウス先生が偽造したっちゅうわけは」

「ないやろ。いま俺らは一部始終見てて、そんな素振りなかったし……ネイガウス先生自身、グール完全に消した思てはるから、千切れた片手の逃走にはおそらく気付いてへん。」

「考えられるとすれば……元々“鍵は2つ対”になってたっちゅうことか…」

「まあそう考えてまず間違いないやろ。子猫丸の詠唱六十六章“去視”は正確無比。コレだけの痕跡からの過去の透視は確実や」

「戦ってたネイガウス先生は、グールが鍵持ってたことに気付いてへんみたいやったしな。」

「次、どないします？坊。」

「ネイガウス先生のところは奥村達がいる。まあ後で互いに情報交換といくか……次はあの鍵について調べてみよか」

「けど鍵持ってはるの奥村君ですよ？坊」

「知っとるわ！“2つ対の鍵”つつうのを徹底的に調べるで！」

「坊くくく……この学園を往き来するのに一体どれだけの鍵あると思てはるのく？」

「文句言うなや！志摩。行くで」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4366y/>

闇の鍵

2011年11月18日04時56分発行